
自称無敵のおっさんの異世界旅行

天地乖離す開闢の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自称無敵のおっさんの異世界旅行

【Nコード】

N0925I

【作者名】

天地乖離す開闢の星

【あらすじ】

自称クウネル・サンダーズ本名アルビレオ・イマの暇つぶしの思いつきで異空間魔法によってとばされたのは自称無敵のラカンである。しかしラカンがとばされたのはゼロの使い魔の世界だった！そしてラカンはハチャメチャパワーでゼロの使い魔の世界を突き進んで行く！？

プロローグ（前書き）

思いつきで書いた作品です

ラカンをゼロの使い魔の世界に送り込んだら楽しいかな？みたいな事を考えて書きました

どうぞよろしくお願いします

プロローグ

ここは、まほら学園図書館島の地下にあるクウネルの館
今ここで二人の男が話しをしていた

二人の男の一人、中性的な顔をした男は魔法世界では知らぬ者はいない《紅き翼》の一員である自称クウネル・サンダース本名アルビレオ・イマであり、もう一人の褐色の肌で極限まで鍛えられた肉体を持った男は、こちらもかの《紅き翼》の一員で知名度でいえば《紅き翼》のリーダー的存在の【サウンド・マスター】ことナギ・スプリングフィールドに並ぶ者【死なない男】【不死身バカ】【つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで】の異名を持つ《千の刃》と名高きジャック・ラカンである

魔法世界にいる筈のラカンは、今アルビレオ・イマに呼び出されてクウネルの館に来ている

『おい、アル』クウネルです』 いや、だからアル『ク・ウ・ネ・ルです』わーったよ（呆）で、クウネル 俺をこんなトコ呼び出して何の用だ？』

『最近暇でしてねー
やることがないので本の整理でもと思って整理してたんですけどその時にこれを発見したんです』

クウネルは一枚の大きめの古い紙を取り出した

『何だこりゃ？魔法陣？』

『はい♪正解です』

正確には空間魔法の魔法陣ですけどね♪』

『何でこんなモン俺に見せたんだ？調べろつても無理だぜ？どつちかつーとお前の分野だろ？』

『それについては大丈夫です 調べはついていきます』

だいたい貴方のような筋肉バカに頭を使う事を頼むワケないじゃないですか♪』

何気に毒舌なクウネルであつた

『だつたら尚更何でだ？』

『これはどうやら異空間に繋がる魔法陣のようなんです♪』

『へえ〜 で、俺を呼んだのは』

『面白そうなので発動してみたくなつたんですよ』

『おい、まさか・・・（汗）』 『察しがいいですね♪流石です
そうです貴方にちよつと実験台になつてもらいたくて♪』

ちなみに拒否権はありませんよ？

私の借金まだ返し終わってませんよね♪

安心してください貴方は異常に頑丈ですから何が起ころうと大丈夫
なはずですよ♪』

あと借金もチャラにしてあげますよ♪』

『・・・ったくわーったよ』

やりやいいんだろやりや
『

ラカンはどうやら諦めた様だしかし諦めたというより借金チャラに
つられているような……まあ気にしないでおこう

『理解が早くて助かります』
では魔法陣の上に立ってください』

『へいへい』

『じゃいきますね』

パアアアアア

魔法陣がひかりだした

『では、行つてらっしゃい』頑張ってくださいね』

『お前ろくな死に方しねーな』

そう言つてラカンは光の中に消えた

『そういえば異空間じゃなくて異世界に繋がる魔法陣だった気が・
・まあジャックなら大丈夫でしょう』
さてキティでも呼んで遊びましょうかね』

その後クウネルの館に一人の少女の叫び声が響いたという・・・

第1話・最強の使い魔召還？（前書き）

ようやく完成しました

この話を読むにあたっての注意点

ラカンはいファニアの使い魔になります

ティファニアの年齢を一つ上げてルイズ達と同年代にしました

ティファニアがエルフだと知っているのはルイズ、キュルケ、タバサです

ティファニアはこの3人とかなり仲良しです

ルイズとキュルケは相変わらず……

位かな？

以上の点を理解したうえでよろしくお願いします！

第1話・最強の使い魔召還？

《ハルゲニア》

現在この場所、ハルゲニア大陸トリステイン王国にあるトリステイン魔法学院にて2年生が「春の使い魔召還の儀式」が行われていた・

『サラマンダーだ！キュルケがサラマンダーを召還したぞ！』

『こっちはタバサがドラゴンを召還したわ！』

『流石【微熱】に【雪風】だな！』

どうやら2人の生徒がそれぞれ珍しい使い魔を召還したらしく、周りの生徒がその2人の生徒【キュルケ】と【タバサ】を誉め称えていた・

『ふむ・・・・ミス・ツエルプストーはサラマンダー、ミス・タバサはウィンドドラゴンですか。これは凄い・・・・さて次の2人で最後ですね』

ミス・ヴァリエール！ミス・ウエストウッド！前へ！』

『はい！』』

名前を呼ばれた2人の少女、何故か帽子をかぶり、美しい金髪を持ち処女雪の様な白い肌を持ち大きすぎる程の胸を持った美少女【ティファニア・ウエストウッド】、ピンクの髪に可愛い容姿をもっているが胸はティファニアとは天と地程の差がある平らな胸を持った美少女【ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール】は緊張した面持ちで皆の前に出る

ルイズは不安だった

何故ならルイズは魔法が全然使えないのだ。どんな魔法を唱えても毎回爆発するだけだった

その結果つけられたあだ名が“ゼロのルイズ”

今回の使い魔召還には進級がかかっていたので不安はより大きくなるがなんとかその悪い考えを吹き飛ばした……

『（大丈夫、落ち着いてやればきっと上手くいく。もう“ゼロ”何て言わせないんだから！）』

ティファニアの方もルイズ程の不安ではなかったがやはり緊張していた……

『（大丈夫、大丈夫）』

『では始めてください』

『……我が名はティファニア・ウエストウッド／ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール 五つの力を司るペンタゴン…… 我の運命に従いし使い魔を召還せよ!』

ピカアアアアア!!

ドカアアアアアン!!

ティファニアの前は目映く輝き、ルイズの前は大きく爆発したルイズが起こした爆発の煙が周りを包む……

『ケホッ! また失敗かよ!』

『だからお前は“ゼロのルイズ”なんだよ!』

『ミス・ウエストウッドの方はちゃんと成功して光ったのに何で前のは爆発するんだ!?』

と、周りの生徒が次々に怒鳴り始める

『待ちなさい…… どうやら成功の様ですね』

爆発の煙が消えていくとティファニアの前には褐色の肌を持ち鍛えられた肉体を持った男が、ルイズの前には黒髪で特に特徴が無い少年で二人とも見たことのない格好をして倒れていた……

『……平民?』

と、ルイズが呟いた

ルイズは勢いよくそこにたっている頭がかなり悲しい状況になっている教師の方を向き言った

『ミスタ・コルベール！』

『何だね？ ミス・ヴァリエール』

『お願いします！』

もう一度サモン・サーヴァント（使い魔召還）をさせてください！
！』

『……それは出来ません』

『Σ！何故ですか！？』

『この神聖な使い魔召還の儀式をやり直すことは出来ない
やり直せばそれこそ儀式への始祖ブリミルへの冒瀆ですよ！？』

呼び出した以上彼が君の使い魔だ』

『そんな………』

ティファニアは儀式のやり直しを要求することはなかったが、やはり呆然としていた……

『さあミス・ヴァリエール！ミス・ウエストウッド！早くコントラクト・サーヴァント（使い魔契約）を済ませなさい！』

『……はい』

そういうと2人はそれぞれ己が呼び出したであろう男に近づいて・

……

『すいません！起きてください！』

とティファニアは優しく起こしたが、ルイズは

『このバカ！早く起きなさいよ！』

ドカッ

つと目の前で寝られたのが余程勘にさわったのか黒髪の少年の腹を蹴りつけた

『んあ？』

『グハッ！なっ何だ！？』

褐色の肌で筋肉質の男は普通の反応だが黒髪の少年の方はいかにも痛そうだ……

ラカンSide

アルのヤローの魔法で飛ばされた俺は珍しく気を失っていた
そこに

『すいません〜起きてください〜』

何か俺を呼ぶ声がしたのでとりあえず起きてみた

『んあ?』

目の前には金髪巨乳のじょうちゃんがいた

『何だ嬢ちゃん何か用か?』

『あの……えつとですね……』

何か言いづらく口ごもっていたらハゲの男が嬢ちゃんに話か
けていた

どうやら変わりに言う様だ

『私は教師をしていますコルベールといいます

あなたは、ここにいるミス・ウエストウッドによって使い魔として
召還されたのです』

どうやらアルの持っていた魔法陣はこれに繋がっていたらしい

『へえ〜じゃあ俺はその嬢ちゃんの使い魔になればいいのか?』

『そうしてくれると助かります

何せこの使い魔召還は進級がかかっていますので……』

どうやら俺が使い魔とやらにならないとその嬢ちゃんが進級出来
ないらしい

よし！ここはこの俺様が一肌ぬぐか！

『まあいいぜ』

そう言つと嬢ちゃんが驚いて

『ホントにいいんですか？』

あの・・・ご家族とかは？』

『ああ俺は家族いねえから心配すんな』

『あの・・・ごめんなさい』

『気にすんなつて』

この俺様に任せとけ』

『では、ミス・ウエストウッド コントラクト・サーヴァントを』

『はい。』

あの・・・じゃあ契約するので目の瞑ってもらっていいですか？』

『？よくわからんが、目の瞑ればいいんだな？』
と言つて俺は言われた様に目を瞑つた

『我が名は』

ティファニア・ウエストウッド

五つの力を司るペンタゴン

この者に祝福を与え我が使い魔となせ』

どうやらこの嬢ちゃんは大ティファニアと言らしい
呪文が終わって数秒後突然嬢ちゃんにキスされた

この世界でも契約はキスらしい……

目を開けると嬢ちゃんは顔を赤くしていた

すると右手に痛みが走った。多分普通のヤツなら痛みで声ぐらいあげるんだろぅが俺様は無敵なので当然へっちゃらだ
ラカンSide終了

『あのゝ痛く無いんですか？

ルイズの使い魔さんはとても痛がってましたけど？』

『俺様は無敵だからな！

そついやあ名前言ってなかったな

俺は【ジャック・ラカン】だ まあ好きに呼んでくれ』

『あ、はい

私は【ティファニア・ウエストウッド】です
よろしく願います！』

『おう、よろしくな』

『あつ ルイズの方も終わってたみたいですね
何かもめてますけど（汗）……』

ルイズと黒髪の少年は言い争いをしていたが此方に気付くとこっち

に歩いてきた

『アンタがティファの使い魔？でっかいわね』

『おうよ！ジャック・ラカンだ
よろしくな嬢ちゃん』

『アンタ・・・貴族に向かって・・・まあティファの使い魔だから許してあげるわ
私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
よ』

『長えな オイ（呆）
で、そっちで気絶してんのは？』

『ああ これは ヒラガ・サイトだっけ？
一応私の使い魔よ
まったく何で私の使い魔が平民なの・・・ブツブツ』

『無事にコントラクト・サーヴァントは終わった様ですね
では、皆さん戻りましょうか』

頭が寂しいコルベールがそういうと生徒たちは次々に城の中に入っていた

『じゃあ私たちも行きましょうか』
そういつてティファニアとラカンとルイズは城に入っていた

ちなみにサイトは気絶していたためレベテーションの魔法をかけられルイズの部屋に運ばれいった……

『（そういや ヒラガ・サイトってヤツ名前からしてこの世界の人間じゃねえな

でもあの反応を見ると魔法の事は知らねえな多分“此方側”の人間じゃねえな

まあいいか）』

第2話・サラマNDERと朝食（前書き）

キュルケとタバサ登場します

第2話・サラマンダーと朝食

召還日の後

ティファニアの部屋・・・・・・・・・・

『あの・・・・・・・・では、改めてこれからよろしくお願いします』

『おうよ！』

で、使い魔っーのは何すりゃいいんだ？』

『そうですね・・・・・・・・主人となるものの目や耳になったり、秘薬などの主人の望むものを見つけて持ってきたり、そして主人を守る役目をしたりします
大抵の人は最後のが一番大切だっていいです・・・・・・・・だいたいこのぐらいでしょうか』

あつ！でもラカンさんは強そうですねけど人間ですから無理はしないでください！』

『ふゝん成る程な』

とりあえず俺は今嬢ちゃんの目や耳になれてんの？』

『いえ・・・・・・・・何も見えませんし聞こえません』

『じゃそれは無理として　もの探しは知ってるならなんとかするか』

もな

『守る役目は問題ねえな』

『でも、怪我でもしたら……』

『心配すんな』

俺は向こうでは最強の傭兵剣士と呼ばれてたんだぜ？

余程の事がないかぎり問題ねえよ』

『そうなんですか？』

でも、無理はしないでくださいね』

『わかったよ嬢ちゃん』

『あの……できれば嬢ちゃんは止めてもらえますか？』

『じゃティファニア』

いや、なげーなティファでいいか？』

『はい』

ではそろそろ休みますか』

『だな』

俺はどうすりゃいい？

別に外でも問題ないが？』

『え……でも……』 『わーった』

じゃ毛布一枚くれ床でねる

昔からこうゆう事は慣れっこだから問題なえよ』

『・・・わかりました
でも、辛くなったらすぐに言っ
て下さいね!』

『了解 了解 (笑)』

『じゃあ準備しますね』

『俺がやんなくていいのか?』

『ラカンさん毛布の場所分かります? (笑)』

『そっぴやそうだな (笑)』

▲
▲
▲
▲
▲
▲
▲
▲

『じゃあお休みなさい』

『おっ』

次の日の朝・・・

『んあ？朝か……』

『ラカンさんおはようございます』

『おう、おはようさん

早えなティファ』

『ここに入るまでは家の仕事を一人でやってましたから』

『成る程

そついや、嬢ちゃんの耳とがってんだな』

『Σハッ！』

ティファニアはしまったといったそうか顔で耳を急いで隠した

『私エルフのハーフなんですよ……やっぱり怖いですよね』

ティファニアは泣き出しそうな声でいった

『いや、全然（即答）』

『えっ？』

ティファニアは予想外の返答に驚いた

『俺はこの世界の事情知らねえし、はつきり言ってエルフに恐怖なんて1ミリも感じないね

だいたいこの俺様がある種族ってだけで恐れるなんてあり得ねーよ』

『そうですね……グスン』

ティファニアは自分が恐れられない事に安心したのか涙を流した
今までエルフというだけで世間から虐げられてきてこの学院に入っ
てルイズ キュルケ タバサ は怖がらずに友達になろうと言って
くれたが、やはりまだ安心できず帽子をかぶり耳をかくしつ生活し
ていたのだ

『安心しな

この俺様が使い魔になったんだ必ず守ってやつからよ』

ポン と軽い音を立ててラカンがティファニアの頭に手を置いた

『あつ……（なんだかお父さんに頭を撫でられているみたい
で安心する）』

『わかつたろ？

じゃあさっさと涙拭いて朝飯行こうぜ』

『はい！』

ティファニアはとても嬉しそうに答えた

食堂へ向かう廊下……

『あら、ティファじゃない　おはよう』
『おはよう』

歩いているティファニアに気付いたキュルケとタバサが声をかけてきた

『おはようございます』

『ティファニア？また敬語？』

『あつすいままじゃなかった、ゴメンね
まだなおらなくて』

『まあいいわ、そのうち慣れるでしょ
ねえタバサ？』

『コクッ』

タバサは小さく頷いた

『で、あなたがティファの使い魔？』

『おう、ジャック・ラカンだ』

『私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・
ツエルプストーよ
キュルケでいいわ』

でこつちが』

『タバサ……』

『相変わらず長えな

それに比べてそつちのちつこい嬢ちゃんは短くて助かるな』

『あら、ルイズ』

『キ、キュルケ！

何でアンタがここにいるのよ！』

『何でって食堂に行くために決まってるでしょ？』
キュルケは当然でしょと言い返した

『おい、ルイズ誰だ？』

『あなたはルイズの使い魔ね
私はキュルケよ』

『ヒラガ・サイトだ』

『ヒラガ？かわった名前ね？』

『ああ違う違う

ヒラガはファミリネーム 名前はサイトだ』

『かわってるのね』

でも、ホントに平民なのね。やっぱり使い魔って言ったところいう
がいいわよね。

ね〜フレイム〜」

キュルケが名前を呼ぶと後ろから尻尾に火をつけた大きなトカゲが出てきた

「Σうあっ!」

サイトはかなりびっくりした様だ

「これサラマンダー?」

「そうよ〜見てこの尻尾。ここまで鮮やかで大きな炎の尻尾は間違はなく火竜山脈のサラマンダーよ!

ブランドもので好事家に見せたら値段なんかつけられないわよ?」

そう言つて傲慢気にキュルケが言う

「ほお〜サラマンダーか〜久々に見たな〜」

「旦那サラマンダーを知ってるで?」

「ん?」

急に話かけられ声の主を探すラカン

「こつちですぜ旦那」

「お前か?」

どうやら声の主はキュルケのフレイムのような

「お前喋れたのか?」

「いや、多分話せるのは旦那だけだと思つぜ」

『そうなのか？』

しかしこの世界のサラマンダーはおとなしそうだな』

『旦那の世界ではちがうんで？』

『おう、もつと凶暴そうだった

まあ俺様の敵じゃなかったけどな！』

『ハハハハハハ（苦笑）』

フレイムの頬がひきつっている

『しかし旦那のめっちゃめっちゃ強えな？』

感じる覇気がハンパねえ』

『わかんのか？』

『野生の勘ってヤツつすよ』

などと談笑していると

『フレイム』行くわよ』

『お嬢が呼んでいるんであつしはこの辺で』

『おお またな

（カモみたいなさラマンダーだったな）』

『じゃあ私達も行きましょうか』

そう言ってティファニアはルイズと歩きだした

『あの……』

『ん？どうしたばーず』

『俺はサイトっていいます』

『ラカンだ よろしくな

じやあ俺らも行くか』

『そうですね』

『ここが食堂か……でけえな』

『じゃあ入りましょうか』

『本来使い魔は外なだけからね！
感謝なさい！』

そういうとルイズはずかずかと食堂に入っていった

『ラカンさんの主は優しそうですね……』

『まあ頑張れや』

『なあルイズ俺の飯は?』

『目の前にあるじゃない』

目の前には固そうなパンが一切れあるだけだった

『ラカンさんはあんなにあるじゃないか!』

そう、ラカンはルイズ達と変わらない量のご飯を次々に食べていた

『しょうがないじゃない

ティファが許したんだもの

アンタね使い魔の分際でご主人様に口答えしてんじゃないわよ!』

そういうとルイズはサイトはお構い無しに食べ始めた

『理不尽だー!』

サイト惨めである……………

第2話・サラマンダーと朝食（後書き）

ラカンの力はウィンダーウィルにしました

第三話・決闘でラカンハチャメチャパワー炸裂！（前書き）

久しぶりの更新です

第三話・決闘でラカンハチャメチャパワー炸裂！

ラカンは朝食を食べ終わり、食堂を出て廊下を歩いていた

『おい！ギーシュとルイズの使い魔が決闘するらしいぞ！』
という話し声が聞こえてきた

『ん？ルイズつーと、ティファのダチの嬢ちゃんだったか？』

『はい……けど、どうしよう……普通の人がメイジ相手に決闘なんて……』
ティファニアはかなり心配した様子で言った

『まあヤバくなったら俺が何とかするって
とりあえず決闘場所に行くか』

『そうですね』

決闘は前半はギーシュが魔法で圧倒していたが剣を握った瞬間サイトの動きが変わりギーシュのワルキューレの全て倒し、逆転勝利を得た

『よう、ぼーず
頑張ったじゃねーか』

『ラカンさん……』

『俺からしたらまだまだだが、今のところはよくやったな』

『はい……』

そう返事をした途端にサイトは崩れ落ちた

『おっと……』

ラカンはすかさずサイトを支える

『サイト!!』

ルイズが駆け寄って来る

『大丈夫だ』

疲れて気を失っただけだな』

『そう……』

ルイズはそれを聞き安堵の息をもらす

『おい! その平民!』

『あん?』

するといきなりメイジの少年が一人ラカンを呼んだ
ローブの色からして上級生の様だ

『何だよなんか用か?』

『メイジが平民に負けるワケがない
ルイズの使い魔がたまたま強かったただけだ！
それを僕が証明してみせる！

僕と決闘しろ！』

いきなり決闘を申し込んでくるメイジの少年

『やだねめんどくせー』

当然断るラカン

しかし

『断るのか？ルイズの使い魔は逃げなかったぞ？この臆病者が！』
と馬鹿にしてくる

『はあ．．．．わーったよ』

『ラカンさん．．．．』

ティファニアが心配した様子で言ってくる

『大丈夫だ

それにまだ俺の力見てねーだろ？』

そう言って中央へラカンは移動する

そして決闘が始まる

『一応名乗っておこう。僕はカリス 二つ名は“北風
北風のカリスだ！』

『あゝどうでもいいから早くこいって』
ラカンは全く興味がない様子で言う

『後悔するなよ！』

“エア・ハンマー”！！』

不可視の風の塊がラカンに向かう

ドオオオオン

『ふはははは！！！！』

どうした？そんなものか平民！？』

自身の魔法が直撃した事で勝利を確信するカリス

『そんな・・・・・・』

ティファニアが顔を青くする

だが、相手はあの伝説の傭兵剣士。学生の魔法程度が聞くわけがない
『なんだ？なんかしたか今？』

煙の中から全く無傷のラカンが現れた

『なっ！無傷だと！？』

ラカンを見てかなり驚くカリス

『じゃあ、今度はこっちの番だな！』

そう言って構えるラカン

『トウッ！』
ダンッ

ギャルルルル

いきなり身体をひねりながらジャンプする

ギョーンッ

キラーン

そのまま空中で構える

『“羅漢適当に右パンチ！！”』

ドオオオオン！！！！

ラカンが拳をくりだすと、その衝撃がまるで衛生砲のようになって
カリスを押し潰す

びくびく

カリスは一応生きてはいる様だ

『安心しな 寸止めだ
命まではとらねえよ』

流石最強の傭兵剣士。完全に規格外だ

『（どうゆー寸止めだよ・・・粉々になってないところか？）
心の中で誰かがツツコんだ』

『す、凄いですね・・・』
若干頬をひきつらせながらいうティファニア

『あつたりめーだ』

それよりサイトとこ行くぞ』
静寂を残しラカンとティファニアはサイトのもとへ向かう

その頃学園長室

『学園長あの者は一体何者なんでしょう？』

『わからんが・・・とりあえず敵に回すのは止めておいた方が
懸命じゃな・・・ワシまだ死にたくないし・・・下手した

ら学校壊されそう．．．．．』

『ですね．．．．．』

などという会話が行われていた．．．．．

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0925i/>

自称無敵のおっさんの異世界旅行

2010年10月10日02時31分発行